

第1部 子どもたちに、意義ある動物体験を与えるために

Part 1 : Giving Meaningful Experiences to Children

中川 美穂子 社団法人 日本獣医師会 学校動物飼育支援対策検討委員会副委員長 / 中川動物病院長 /
全国学校飼育動物研究会 事務局長 / 全国学校飼育動物獣医師連絡協議会主宰

Mihoko NAKAGAWA

Vice-Chair for Humane & Science Education Utilizing School-owned Animals, Japan Veterinary Medical Association

Director, Nakagawa Animal Hospital

Secretary-General, Society for Humane & Science Education Utilizing School-owned Animals President, Japanese

Veterinary Council for School-owned Animals

2011/5/26

子ども達に意義ある動物体験を 与えるために



全国学校飼育動物研究会 事務局長
社) 東京都獣医師会理事
社) 日本獣医師会学校動物飼育支援委員会副委員長
中川美穂子

学校飼育動物とは

- **子どもの成長を助けるために**
- 学校・園で飼育されている動物たち
- 愛玩動物とも、家畜とも違う
- しかし、愛情深く扱わなければ、..
- @動物飼育の
- ****目的、方法、与え方**が大事**
- 何をどう飼うか

今、人が壊れようとしている

- 命がわからない・自己中心的
人とコミュニケーションがとれない
 - どうすれば良いか
愛情と共感を培う・命を教える
友達など周りとかかわる楽しさ
- を感じる神経回路を発達させる



筑波ビデオ

子どもへの影響はなぜ？

- **動物が「かわいくなり」大事な存在になる**
動物のために必死で工夫 認知能力 実感
こどもは庇われる存在だが、自分より弱いものをかばう
- **動物を介在しての三項関係をつくる**
友達や親との関係を助ける コミュニケーション促進
- **心的視点移動**
一緒にかわいがる(協力 人の気持ちがわかる)
動物の気持ちを考える
- なにより**子どもにとって動物は魅力的**で入りやすい

動物: その感情がみて取れる種類

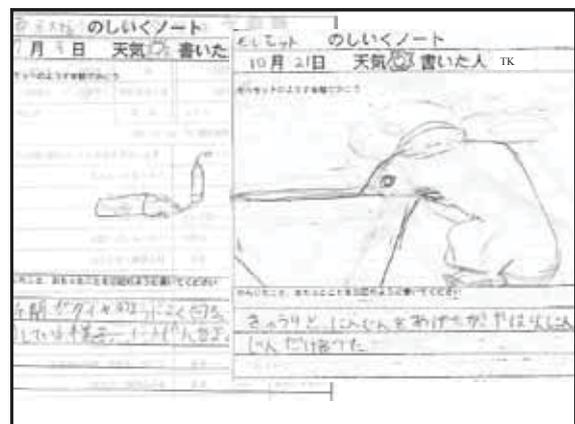
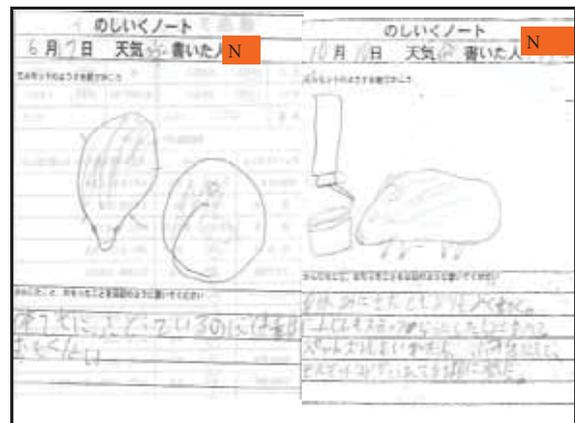
かわいい 笑い声のもれる楽しい飼育に 大変すぎる作業はさせない

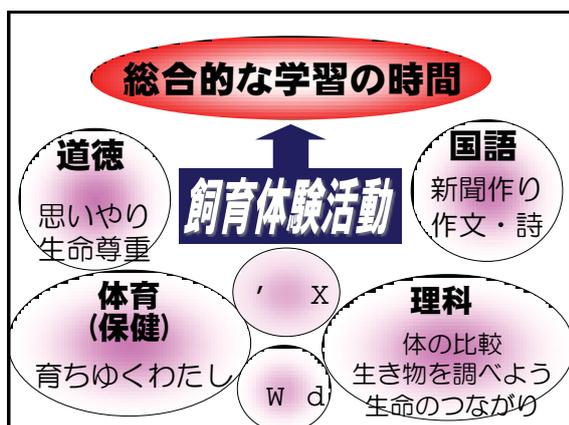
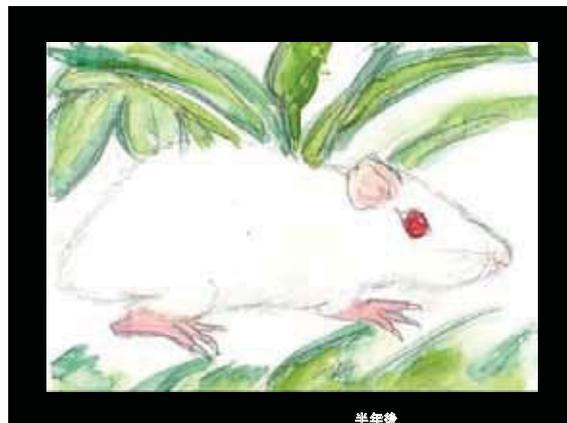
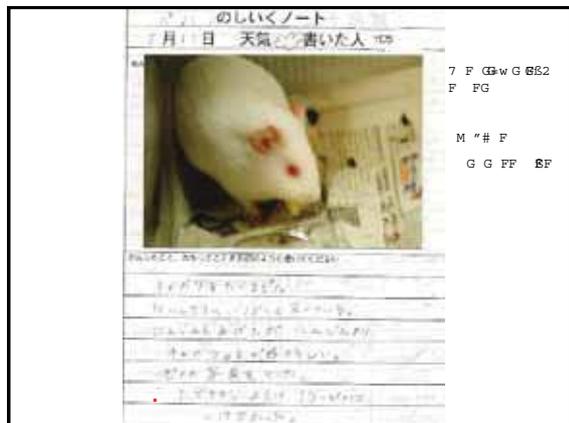
- 掃除しやすい飼育舎 ・コンクリート床・巣箱
- **世話の簡単な種類**を少しだけ・・チャボとウサギ
- 繁殖を制限して、増えないように飼う
- 休日には保護者が当番児童につきそう
(教育参加)
- 地域の獣医師の助言と支援を**簡単に**得られる
体制をつくる(行政)

基本・子どもに**親しみ**を持たせる→ふれあい



継続飼育・金曜日在家に、そして日記





4 "F)r F *fH 8°*æ q •H

- 4 vH G2 G N GG •"@FH G G FF M
- 9 vH *" 8GH " ' F 2A eFB FG
- 10 vH 8 @GAG = G Gy ^ G1 # 5 q •
- 11 vH ,A G W d
- 3 vH W(# G F ,)EF 6 &

MG v 6 ° F, W (# F M)tFB a0 G"FOG

休日の世の中 H 0v °Gjw G EG1E00v ° \ \$

2







体の仕組みチーム
 チーム士
 ひな・親はなしチーム
 観察チーム
 うさぎトイレチーム
 にわとり三歩
 うさぎのふん対策チーム
 仲良しチーム
 包丁ときチーム
 ちゃぼウォッチング
 にわとりの飼い方
 しつけチーム
 えきプラボ
 すずめチーム

H18年度3学期
4年2組 発表

飼育…土は安全か？

チーム名 チーム士

根本 聡深 吉原 康太



調べたきっかけ

毎日、イエローとプラットがげりをしていた



↓

土のせいなのか？
にわとりが土を食べても安全なのか？

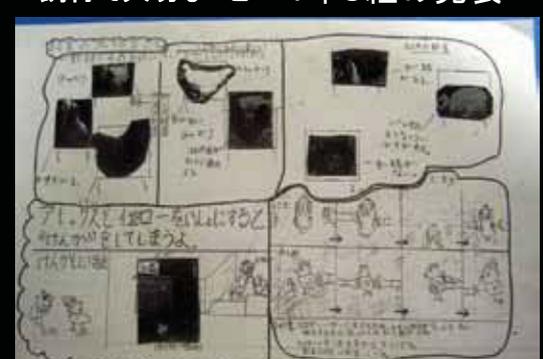
そこで…下痢のことを調べました

インターネットで…

春から秋に多い土の中にある
ウェルシュ菌が原因？

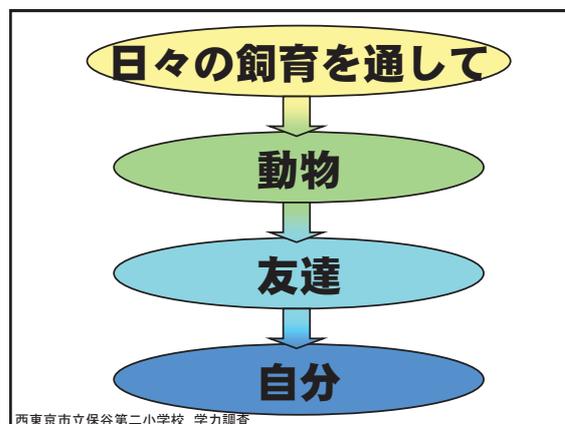
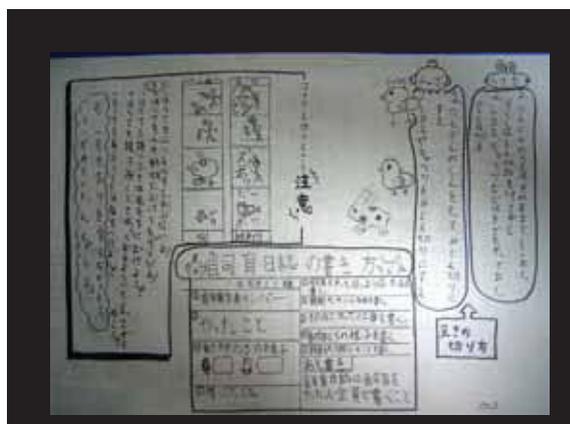
腸に行き、ひどい腫れをおこす
若いにわとりに発生することが多い
口や傷口からうつる
血のまじって便をする

飼育で大切なこと 4年3組の発表



作文



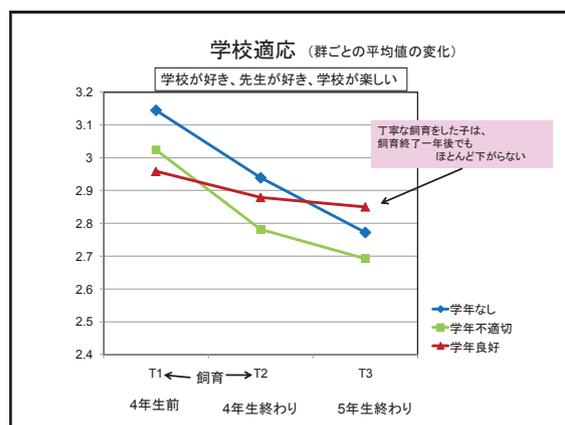


学年飼育体験が子どもの心理的発達に与える影響
学校動物との触れ合い・世話は、思いやり、適応を育むか？
 中島・無藤・中川(2011)

方法: 東京都下の12の小学校で4年生を対象に3回の質問紙調査
 T1: 学年飼育開始前
 T2: 1年間の学年飼育終了後 T3: 学年飼育終了から1年後

対象者: 学年飼育の有無と質を評価 → 3つの群に

- 学年飼育方式群(247名)**
 - 交代で学校動物の世話、導入時に触れ合い指導。
 - 明確な教育的ねらい。
 - 教員が指導的に関与。
 - 獣医師に相談、指導に従う。
- 学年方式不適切群(203名)**
 - 交代で学校動物の世話、触れ合い。
 - 明確な教育的ねらいはなし。
 - 教員の関与の薄さ。
 - 獣医師への相談はほとんどなし。
- 対照群: 委員会方式群(318名)**
 - 飼育は5・6年の飼育委員のみ。4年生は動物飼育にかかわりなし。



考察

学年飼育方式群: 対照群よりも、学校適応、他者への温かさの低下が小さい。動物への共感性が増加。
 → 動物や他者への思いやりを育む + 友との協力 + 学校が好き

学年方式不適切群: 対照群よりも、他者への温かさの低下が大きい。
 → 思いやりの発達を妨げる可能性も

学校動物との触れ合い・世話は思いやり、適応を育むか？

Yes! 適切な飼育で。

- 明確な教育的ねらい
- 教員の指導的な関与
- 豊かな触れ合い
- 獣医師に相談、助言支援を受ける

- 学校は、教育課程に位置づける
好きなor担当の先生だけではなく**全体で支える**
- 保護者が、「子育てのために」と理解して、**参加する**
休日の世話、アレルギー・衛生不安
(学年飼育・学年の親)
- 近くの専門家が、学校獣医師として支援する
(行政が学校の相談相手を派遣)
* 学校は費用を負担しないシステム)



日本では二〇年ほど前から、「動物は好き」と言っても本物を怖がり、触っても、子猫の小さな爪が当たただけで、「痛い」と投げ捨てる子どもが見られている。本当に痛みを感じたのか、小さな猫がそんなに怖い存在なのか、投げ捨てられた子猫の苦しみは想像できないのか？そこには生物への冷静な視点や思いやりの心、命を大切にできる態度は見られない。

また、園や学校からは、「台風一過だね」と難しい言葉を使う五歳児が、初めて抱いたウサギのスイッチを探したとか、たまごっちが死んだら涙するなどの話が聞えてくる。私自身、小学生に関わる中で、その学校の動物とのふれあい教室支援の後、ウサギを抱いた複数の一・二年生から「ウサギは何でできているの?」「どうして動くの?」と小さい声で質問されて、思わず「え?」と大声で聞き返し、泣かせてしまった事があるが、「人間と同じよ」というのが正解だったのだろう。この子たちは、映像の動物には夢中だが、実際の生きた動物には、少しも触れる機会がなかったのだ、と感じている。また、「ペットはマリモ」と答える何人もの三・四年生にも会ったが、生きた動物が傍にいないければ、動物への関心も湧かず、マリモが動物か植物かの見分けがつかないのだろう。逆に、教室内のモルモットを可愛がり、土日は家庭に持ち帰る丁寧な飼育をしている複数の教師は、動物が身近にいることで、子どもたちは、その他の生物にも関心を持ち、その動物が食べる植生（例、アゲハの幼虫が食べるサンショの葉）などにも関心が波及すると言う。

あの悲しい佐世保市の事件では、加害者の生命観の未熟さに驚かされたが、その後も、車の中に子どもを置き去りにし、熱中症で死なせたり、オートバイの座席の中に一歳の子を入れて窒息死させたり、スキーに出かけて十八時間も乳児を放置して死なせたなど、思ってもみない事件が続発している。これらは若い親世代を含めて、「人を含んだ動物らしさ」を理解できない人たちが増えていることを示している。

また近年、「温かい生きた体を抱いたのは、出産時が初めて」と話す若い母親が増えており、新生児への接し方指導が盛んに行われている。しかし、生後六カ月で保育園に来た時に「無表情の赤ちゃん」、あるいは「笑わない、反応が鈍い、筋肉が硬い」などの発達に障害がみられる赤ちゃんが年々増えている。この子らの親は、きちんと世話しても、抱いてあやすことを知らないと、障害矯正や保育の専門家は心配している。

一方、動物を可愛がって世話している子たちは、ウサ

ギやチャボでも、赤ちゃんのように抱いてあやすが、あのように小さい柔らかい動物の体を気遣いながら抱いて楽しめる子は、将来自分の子もあやして楽しみながら育てられ、愛着障害の心配は少ない。まさに命への親しみと理解は子ども時代の飼育体験のよるところが多い。

「動物を飼育させる時期と意味」

ノーベル賞科学者の小柴・田中両氏は「子どものときは野原で十分に遊んでいた」と述べているとおり、特に小学校中学年以下での遊びをとおして、子どもは森羅万象を理解する基礎を養ってきたといえる。

命の体験も家庭での動物飼育に期待するのが筋なのだが、日本では、大人が慰めで動物を飼う例が多く、子育て家庭での「感情交換ができる哺乳類や愛玩鳥（いわゆるペット）」の飼育率は減少している。世話の面倒さや「動物は不潔」との誤解が原因と考えられるが、小学校中学年の7割以上の子等はこれらの「抱ける温かい動物」を知らないまま育つのが現実である*1。その「隙間」でゲームやロボットが子どもたちを惹きつけるが、機械は飼い主に懐きも逆らいもせず、ボタンを押せばまた動き出すわけで、生き物の息吹も感情も伝えない。これでは、子どもの自己中心性は改善されず、生物学的好奇心も満たされず、まして「どきどきするような探究心」は生まれまいだろう。子どもの頭脳が発達するには、この「どきどきした探究心」が大きな原動力になるが、生きた動物が傍らにいないければ、生物への基本的知識は構築されず、冒頭のような命への無知をあらわす光景が繰り返される。

そのため園や学校での動物飼育活動が求められ、幼稚園教育要領、学習指導要領などに花、土、石、木、水、風、それに動物の体験、つまり自然体験と動物体験が明記されている。しかし、殊に動物体験は、その他と異なり、触りたくても動物が了解しないと触れず、子どもに他者を教える存在と言え。しかも、子どもの競争相手ではないため、無償の愛、思いやる気持ちを養う対象になり、庇われていただけの子どもにとって、庇いたくなる特殊な存在になる。子どもは、この可愛い他者のために、心と体と知恵を使って、労働を引き受け、他者の喜びを、自分の喜びと感じる体験を得る。

「園・学校での飼育体験の与え方」

時期：子どもが動物を飼いたがる時期こそ「生き物への興味や弱いものを思いやる気持ち、いとおしく愛情を感じる脳・感性」が構築される時期と認識して、幼児期から生活科時期と、小学校三・四年生の時期とに、親密な動物体験も与えると良い。

動物の種類：子どもの「心の発達と知識を刺激する目

的に適した動物は、人と視線を合わせて感情を表し、人に懐くことができ、かつ体温が温かい、抱いてほつとする種類とされ、欧米ではこの目的で、犬、猫、ウサギ、モルモット、馬などの哺乳類とブンチョウ、チャボ、インコなどの愛玩鳥を人の伴侶動物（コンパニオンアニマル）と呼んで、他の動物と区別をしている。また、世界の生物教育の最終目的「自分自身を理解できるようにする」には、人と同じ哺乳類が推奨されるが、四本足の鳥の絵を描かせないためにも、鳥類も、生物教育の基礎構築には重要だろう。なお、犬猫は特定の人との愛情が必要なので、教員の移動がある学校では飼えない。またアヒルやヤギなどの家畜は世話が大変過ぎるので、飼わない方が無難である。具体的には、飼育舎ではウサギとチャボ、教室内ではモルモットと文鳥が飼育に適切な種類である。

年齢と方法：(幼稚園から生活科) 子どもが興味を持ち大事にする動物を身近に飼い、指導者も一緒に大事にしたい。子どもは教師に感謝し、一緒に心をかけて世話するうちに、様々な刺激を受けられるだろう。動物は、温和な性格で運動性も少なく、また、人を覚えて鳴き声をあげて歓迎するモルモットが飼いやすく楽しめる。

(三・四年生) 好奇心も体力も十分なので、飼育舎のチャボやウサギたちを世話をさせる最適年齢である。「命の教育」として総合の学習に位置付けて全員で飼育体験をする「学年飼育」の成果が、全国学校飼育動物研究会に報告されてきている。この飼育は、世話の負担も喜びも学年全員で分け合え、教育的な効果が大きい。

(五・六年生) すでに成長が進み、今までの体験を知識として発展させる時期で、直接飼育舎に関わらせることはない。

支援方法：飼育始めには獣医師等から、「動物との付き合い方」の「動物ふれあい体験」の支援を受け、獣医師と親しむと良い。子どもが持つ疑問や心配などを、獣医師に相談できる体制があれ

yz > £ ræ ' o z £ M ' £ q æ q y ¶ " æ ' > \$0
 T m GI 9 p V { f U | »q »
 fi ' > w , ¥ :fl ¶ ¶ " ' > æ Z q y ¥ ~
 r xDzj æ M U q af oz \ fi t æ ¶ ¶ " ' > æ M " # ^ q ;
 h t » ' z 7 s > > \$ s fi L fl b { \ w
 O s x z ' > p j O ' M w x fi M ç % ' fi ¶ " ' > æ Q -fl
 h fl q t Q { \ x r U æ w t s l o M I U U Q W FXUXTX O F K Q d T D I P P M Q
 q t Q { ¶ " p x z r U æ T Z o z U f i ¶ ¶ " ' > æ Z y q fl
 ¥ l o M æ > z ' o t ' o ' o x s s M { I U U Q W FXUXTX O F K Q d T D I N P P M Q
 y s S z G ! a W ' > ~ x z J G V X z > > \$
 fi L x r _ s M { r U G t æ q ~ K Q
 O o t b h z ' > # ~

t ' o z æ t w 6 s r w » U O
 A p K { h \$ z q ` w H c m w 0 t ' o z _
 Ø M v ' o ' M æ M U ` M E p , ' ' > t b
 {
 fi 7 t fl
 ¶ s x z 0 ` \ w ~ w N - p z fi & ~
 s ¶ ' > . g x z w ' ^ ¶ " & t M E ,,
) Q fl fi \ w fi L p x z ' H > U ' X z ¶ " p &
 ~ s > > ! Z hp G V T l h fl q C ' , h { &
 ~ ' > " x z ' > ~ } > t ' Z z j T
 Z h ' > ' b h t z ' > fi ~ K M > E fl
 ç M ' £ § 5 æ z æ w . q @ w
 H Ø q ~ K Myw s x fi , tsx U ` M fl
 fi , T # ' o x M Z s M fl q g r ^ d
 -ç U H Ø t C { ç r U t z U h
 r w æ D j U > , j g r ' h q z w
 M q Ø U C ^ o M £ \ t \$ p ~
 K M > E O ^ \$ » t ~ ; { M ' £ t
 X \$ p z g J \$) Q 8 / t " ¶ w fi '
 > V ' W B q fl p z w ' > . g q o C fl
 ç > £ t q l o R & w s £ s r l o
 M h {
 y . g z \ q t , g r ^ d æ . g x z r
 U . g ' h U t f ¶ ¶ " U < w M ' £ w §
 o z M ' > . g) Q o ' M q z m M ' £
 q ' o x æ T & l o M {
 / s fi H p w ' > fl fl fi æ ' > q ~ > > fl
 y W P My
 / æ / ~ { fi ¶ " p w æ ' > w & ~ ^ U
 w æ g \$ a t) Q E ,, fl M ' £ v q % Q
 y W P M y / P

£ M ' £ q æ q y ¶ " æ ' > \$0
 f U | »q »
 ¶ ¶ " ' > æ Z q y ¥ ~
 ¶ ¶ " ' > æ M " # ^ q ;